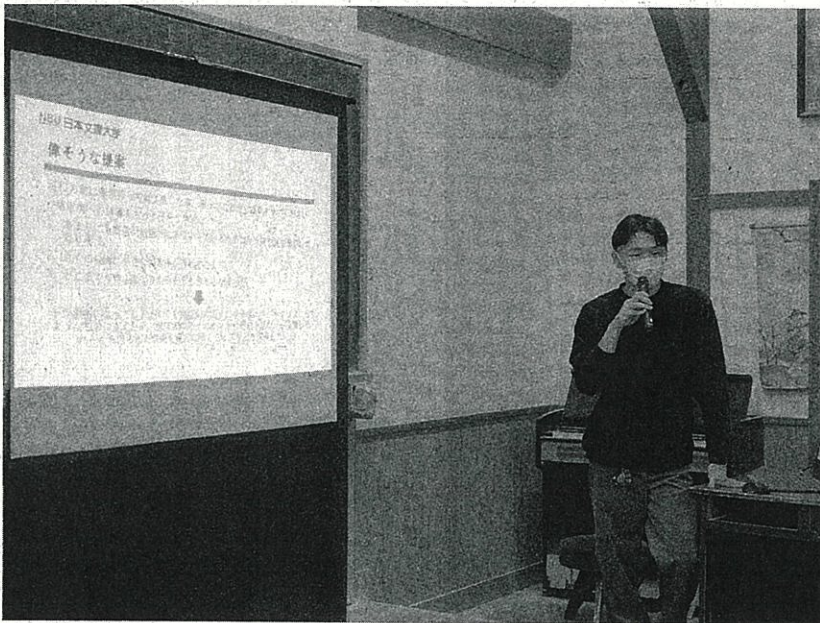


# 学生ら調査を基に具体策提案

# 昭和の町 若者呼び込め

【豊後高田】豊後高田市の昭和の町商店街について、学生目線で魅力や新しいビジネスモデルの可能性を探るプロジェクトの報告会が10月29日、商店街にあるロマン蔵であった。若い世代を呼び込むため、交流サイト(SNS)の活用など具体策の提案のほか、「懐かしさをアピールする考え方を要する必要がある」といった指摘も出た。

プロジェクトは県内の産 地域連携プラットフォームでつくる組織「おおい △」の地域活動事業。日本



昭和の町に若者を呼び込む方策を提案する学生＝豊後高田市

## SNS活用 ■ 「懐かしさ」転換

文理大、大分大、別府大、大分高専の5グループが参加し、1月から取り組んできた。

報告会には学生や昭和の町関係者ら約30人が出席。学生が夏休みなどに実施した現地調査やアンケートで得たデータを基に、若者の来訪を増やすために考えたプロモーション方法を発表。SNSによるPR、昭和の町ならではのイベント開催、地域通貨の発行といったアイデアを出した。

日本文理大2年の佐藤凛さん(20)は「若い世代にとって昭和は懐かしいと呼べる時代ではない。『知らない』ということを最大の武器として新しい魅力を発信する工夫が必要」と強調した。

昭和30年代をコンセプトにした昭和の町は中高年の来訪が多く、若者へのアプローチが大きな課題の一つとなっている。

市商工観光課の河野真一課長は「いずれも素晴らしい提案だった。中にはかつて市が取り組んでいたものもあり、原点回帰の必要性も感じた」と話した。

(大崎優志)

# 韓国の農家向け研

## 農泊アドバイス 「自然体で接して」



【宇佐】宇佐市のNPO法人「安心院町グリーンツーリズム研究会」(宮田静一会長)は10月27日、韓国済州市の農家らを対象にし



安心院町で農泊が始まった経緯やアドバイスをする宮田静一会長

た研修会を宇佐市内支所で開いた。日韓関係の悪化や新型コロナウイルスの影響で開催は3年ぶり。約30人が参加した。

宮田会長(73)が農泊の概要や町内で始まった経緯などを説明。教育旅行で農泊をした中学生が、帰る間際に泣いている様子を写真で紹介した。「受け入れ家庭ごとの事情に合わせた体験を提供し、特別なことはしていない。高級な宿泊施設では見られない光景。現状

き「マト」客巻

警などから9人が参加

なった。地域文化の拠点